

# 須賀の宮 古事記 上巻

それから、この速須佐之男命は、御棲居の御殿を御造りになるべき適当の場所を、出雲国之内に探し求めなさいましたが、須我といふ処においてになりまして、「此地に来たらば、わたくしの気分が清々しくなつた」と仰せられて、やがて此の地に御殿を建てゝ、御住ひなさいましたことになりました。かやうな訳で、此の地を現今でも須賀と云ふのであります。

此の須佐之男大神が、はじめて須賀の宮殿を御造りになりましたと

きに、其処から雲が立ち騰りましたので、御歌を御咏みになりました。

其の御歌は、

八雲起つ 出雲八重垣 夫妻籠に 八重垣作る 其の八重垣を。

〔雲が起つ、雲が涌き起つ、涌き起つ雲が、作る八重垣、雲の垣、夫婦棲ませうと八重垣作る、作る雲の垣、其の八重垣よ。〕

そこで、彼の足名椎神を御召し出しになりましたて、「卿は、わたくしの居る此の宮殿の事を掌る長官と御成りなさい」と仰せられて、其の名号を稻田宮主須賀之八耳神と御附け下さいました。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション 『現代語訳古事記』 植木直一郎 著